

# 「神の御心のままに」

イスラム教を国教と定めているパキスタンでは、「イン・シャー・アッラー」という言葉をよく使う。アラビア語で、文字どおりには「もし神がお望みなら」という意味で、「神の御心のままに」と訳される。

最初はこの言葉にずいぶん戸惑ったことが多かった。たとえば、官庁に出向いて事務手続をおこなない「午後には証明書をいただけますよね」と念を押すと、「イン・シャー・アッラー」と返ってくる。航空会社のカウンターでも「明日の飛行機は大丈夫ですね」「イン・シャー・アッラー」。

滞在先の人びとに「来年も必ず来ます」と言うのと、これも笑顔で「イン・シャー・アッラー」と返答される。

●希望的で肯定的な祈りの言葉

こちらの感覚では「はい、確かに」とか「大丈夫です」、「待っています」という答えを期待するので、慣れるまでは何だか頼りない感じがした。

しかし、決して悲観的な意味ではなく、むしろ希望

的で肯定的な意味あいが強いです。「そうなる」といいですね」とか「神様の御心のままに、無事にその日

を迎え約束事が果たせますように」という祈りの言葉なのである。もし、予想外の結果になったとしても、すべて「神の御心のまま」と誰を恨むこともない。

よく考えると日本にも「一寸先は闇」という諺ことわざもあるとおり、未来の事象にかんしては、たとえ一秒たりとも確約されたものではなく、神のみぞ知る世界である。ふだんは手帳に一年後の予定までぎっしり書き込んで、疑問すら感じなかったが、こう考えると「神の御心のままに」というのは、真実、理にかなった言葉だと納得した。

●人間の力の限界を痛感する

私の研究調査地であるパキスタン北部バルティスタン地方は、世界第二の高峰K2（八六二一メートル）や美しい姿のマツシャーブルム（七八二一メートル）など、八〇〇メートル級（七の山々が連なるカラコルム



フーシェ村から名峰マツシャーブルム(7,821m)を望む

山脈の麓に位置する。

人びとの生活は半農半牧で、急な斜面を耕し小麦や蕎麦や豆類などを作るが、

人口に対する耕地面積は絶対量が不足し、自給自足も難しい。しかも、冬季の寒さは想像以上で、戸外活動は極端に制限される。人びとはカッターとよばれる冬部屋に籠もって春を待つ。

こうした厳しい生活環境のなかでは、何事につけても人間の力の限界を痛感することが多い。日々の暮らしのなかで、人びとが強い信仰心をもち敬虔に祈る姿に、同じ人間として素朴な感動を覚えた。慣れてくると「イン・シャー・アッラー」は、自然と口に出るようになった。

春が近づき、庭に小さな草の芽が出ただけで、人びとはとたんに笑顔になる。「緑が出たね」、「ほんとう、緑が出たね」と挨拶をする。道行く人びとも「来週には、畑仕事をほじめようか?」、「お天気がよいといいね」、「イン・シャー・アッラー」などと会話が弾む。



「鎌立て」早春の良き日を選び供物を供えて、畑仕事をほじめる(サリーン村にて)



おかだ ちとせ  
岡山 千歳  
松山大学非常勤講師  
音楽教育、民族音楽が専門。カラコルム登山の経験を機に一九九四年からバルティスタン地方の民族音楽を調査。この一〇年は叙事詩「ケサル物語」の調査研究に携わっている。